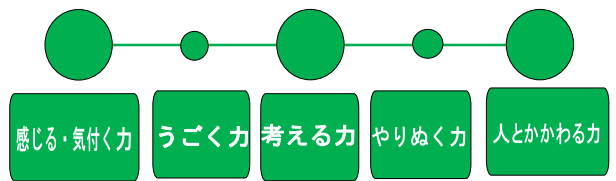




	感じる・ 気付く力	うごく力	考える力	やりぬく力	人とかか わる力
40 ぶにぶに かたかた どろ遊び	●		●		●
41 海賊ごっこ 船が動いた!			●	●	●
42 やっとひけた! ドッジボールのコート	●		●	●	
43 どうやったらヤシャブシとれるかな			●	●	●
44 やったー! フェンスが立った!			●	●	●
45 ダンゴムシの赤ちゃんが生まれた!	●		●		●
46 ピカピカのどろ団子	●		●	●	●
47 どうやったら 粘土のみかんの木は 立つのかなあ			●	●	●
48 川がコーヒー牛乳みたい	●		●		
49 ケイドロしよう		●	●		●
50 相談ジャンケン			●	●	●
51 お楽しみ会ごっこ それ, いいね			●	●	●



【活動の様子】

前日の雨で園庭に水溜りができている。A児は水溜りの中から泥をすくって地面に置き、その上にさらに泥をすくって乗せていくことを繰り返している。それを見て、B児も同じようにしている。ベチャベチャの泥のかたまりが少しずつ大きくなると、2人はその表面をてのひらで優しく触り、「プニユプニユで気持ちいい〜」と、感触を楽しんでいる。

2人の近くでC児も同じように泥遊びをしている。A児はC児の作っている泥のかたまりを軽く叩くようにして触り、「Cくんのフワフワで、私のはプニプニで、Bちゃんはカタカタじゃ!」と言い、カエルの歌に合わせて、太鼓のように両手で叩いて楽しみ始める。

やがて、「あれ、音が違う! 固い方はドンドンって音がして、プニプニの方は…なんかパチパチって聞こえる」と、音の違いを発見する。

泥から手を離すと、ドロドロの土がベツリとてのひらにくっついて落ちないので、「ネバネバ〜! 逆さまにしても落ちんよ」と驚いている。それを見たB児も、てのひらにヌルヌルの土を塗り付け、逆さにして試してみる。保育者も少し目の粗い石が混ざった場所の土を使って同じことをやってみると、保育者のものが一番早く落ちる。

保育者が、「どうしてかなあ?」と聞いてみると、A児が「先生のは、ザラザラの石とか砂じゃけえすぐ落ちたんよ。ここのヌルヌルの使ったら落ちんよ」と教えてくれる。

どっちが長くくっつくか競争することになり、「いいよ。よーい、どん! 1. 2. 3…」と数を数えていると、A児が「あー…なんか落ちそう…」と言う。「どうして分かるん?」と聞くと、「だって端っこの方が何か変な感じがした」と言う。

【遊びの中で育まれている力】

- 雨上がりの園庭の様子に心を動かして遊び始める。
- 泥のかたまりがだんだん大きくなっていくことを楽しむ。【感じる・気付く力】
- 泥の感触の心地よさを味わう。【感じる・気付く力】
- 泥のかたまりの硬さや感触の違いに気付く。【感じる・気付く力】
- A児は、泥のかたまりを叩いた時の音の違いに気付く。【感じる・気付く力】
- 感じたことを言葉で表現する。【考える力】
- 泥の粘り気で、泥がてのひらから落ちないことを発見し、驚く。【感じる・気付く力】

土の粒子と粘り気の関係に気付いているのかもしれない。



- 砂利、砂、泥などのきめの細かさと、泥の粘り気との関係が分かる。【考える力】

泥んこ遊びを楽しむ中で、泥の感触を存分に味わいながら、様々な発見や気づきをし、豊かな感覚が養われている。

- 泥んこ遊びの中で、直接体験を通して泥が剥がれ落ちる時のてのひらの感覚を、言葉で正確に表現し、伝える。【人とかかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【雨上がりの園庭を生かした環境構成】

雨上がりの園庭は、子供たちにとって格好の遊び場である。雨上がりの園庭に出て、水たまりやぬかるみで、心ゆくまで泥んこ遊びを楽しむ状況を作ったことによって、子供たちは、身も心も開放されて遊びに没頭し、様々な気付きや発見をしていった。

【諸感覚を通した直接体験】

泥遊びは諸感覚を刺激し、様々な感覚を豊かにする。子供たちは、諸感覚を働かせた直接体験を通じて、ザラザラ・トロトロ・フワフワなどの泥の感触や、泥のかたまりを叩いた時の音、泥の粘り気など、様々な泥の特性に気付いたり発見したりしている。また、それらを遊びに生かそうとする姿や、発見や気付きを言葉で豊かに表現する姿も見られる。

【発見や楽しさを共有し合える友だちの存在】

友だちと発見や気付きを伝え合い、同じ楽しさを共有することによって、楽しさが格段に増し、新たな発見が生まれている。

【発見や気付きに共感したり、学びを深めたりする保育者の存在】

保育者が子供たちと一緒に遊んだり、不思議に思ったことや発見したことに共感したりすることによって、子供たちの遊びの楽しさが増していった。また、気付きが深まるような保育者の援助によって、子供が考えたり気付いたりする状況が生まれ、学びが深まっていった。

先生方へ…



幼児期には、感覚を磨き、豊かな感性を育てていくことが大切です。豊かな感性は、豊かな知性の土台となります。幼児にとって、ドロドロとした泥の感触は、とりわけ気持ちのよいものです。泥や土は、感覚や感性を磨く最強の素材です。泥の感触を思う存分味わう経験は、諸感覚を使って遊びに没頭できる幼児期にこそ、十分味わわせたい経験の一つです。

本来、子供は泥んこ遊びが大好きなはずですが、最近では、汚れることを嫌がり、泥んこ遊びに抵抗を感じる子供が見られるようになりました。泥んこで遊ぶ子供たちは、全身で泥に浸り、心を解放してたっぷり遊び込みます。遊んだ後は、満足感に包まれ、すっきりしています。泥んこ体験は、たくましく生きる力を育む上でも、大切にしたい体験です。一人一人が、自分のやり方で満足いくまで泥と触れ合って遊ぶことができるように、十分な時間や場を確保していきたいものです。

事例では、日頃から諸感覚を通した気付きや学びをたっぷり楽しんでいるからこそ、感じたことや気付いたことを、素直に、的確に、豊かな言葉で表現する力が育っていると考えます。こういった、感覚を使った気付きや学びは、小学校以降の学習内容を、実感を伴って深く理解できる力につながっていきます。



海賊ごっこ 船が動いた！

【活動の様子】

シンドバッドの冒険の物語を絵本で見たことがきっかけとなり、少人数のグループで、子供たちが船作りを楽しんでいる。段ボールで作った船の先にタフテープを付け、人を乗せて動かすという仕組みの船である。

しばらく友だちを乗せて、船を動かすことを楽しんでいたが、重みに耐えきれず、タフテープが切れてしまう。A児は、ビニールテープを持ってきて、「この線より後ろに乗って。その方が船を動かしやすいから」と、乗っている友だちに伝える。



B児は、「もっと強いヒモがいる」と、保育者に伝えにくる。一緒に教材室に行き、いろいろな種類のなかから、子供たちがヒモを選ぶ。

適当なヒモが見つかり、「これなら大丈夫」、「うん、大丈夫そう」とみんなで予想し、ヒモを付け換え始める。ヒモを付け換え、また遊び始めたが、友だちを乗せて引っ張ると、どうしても左側のヒモが外れてしまう。その度に、繰り返しガムテープを貼って修理している。



「どうして左側ばかりヒモがとれるのかな？」という保育者の問いかけに、A児は右側のヒモの付け方をよく見始める。「こっち（右側）はヒモの端っこが結んである」と左側との違いに気付く。A児は、「左側も同じにしてみよう」と結び始める。

ヒモの端を結び、最後にしっかりとガムテープで固定すると、「よし、船に乗ってみよう」とみんなで試し始める。「一番大きなCくんが乗れたら、誰が乗っても大丈夫ってことよ」、「Cくん、乗ってみて」と促され、C児が船に乗る。

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかかわる力

【遊びの中で育まれている力】

- 自分たちが乗って動かすことができる大きな船を作りたいという気持ちを持つ。
- 遊びに必要な材料を探したり、集めたりする。
- 友だちのしている遊びに興味を持ち、一緒に遊び出す。【人とかかわる力】
- タフテープが切れてしまったが、自分たちなりに考えて遊びを継続する。【やりぬく力】
- 自分で船を動かしてみても気付いたことを、友だちに伝える。【人とかかわる力】

A児は、繰り返し遊ぶ中で、友だちが船の後ろの部分に乗った時の方が、船を動かしやすいと気づき、それを友だちに伝えている。

- B児は、やりたいことを実現させるために、行動する。
- 素材の特性に気づき予想を立てる。【考える力】

B児は、タフテープではすぐに切れてしまうことに気づき、他の素材だとうまくいくのではないかと考えている。口を出さず、子供たちが決定するのを見守ろう。

- うまくいかないことがあっても、友だちと粘り強く試行錯誤する。【考える力】【やりぬく力】

諦めずに、自分たちで何とかしようとしている。何度もガムテープを貼り直して、根気強く取り組む姿を見守ろう。

- 何度もヒモがとれ、くじけそうになる。【やりぬく力】

何度もガムテープを貼り直しているが、それだけではうまくいかないようだ。何とか乗り越えてほしい。新しい視点が生まれる問いかけをしてみよう。

- A児は、よく見て、違いに気づき、発見する。

- 考えたことを実際にやってみる
- 気持ちを立て直す。【やりぬく力】
- 経験から予想する。
- 力を合わせて船を動かす。【人とかかわる力】

「せーの」というかけ声とともに、3人でヒモを引っ張ると船が動く。「やった！動いた！」と喜び合う姿が見られる。

その後、海賊ごっこはクラスみんなの遊びに広がっていった。

・友だちと一緒に満足感・達成感を味わう。【やりぬく力】



・クラスみんなで力を合わせて遊ぶ。【人とかかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【予想したり、考えたりできる時間の確保】

子供たちのやりたいことが実現するように、用具や素材を一緒に準備したり、試行錯誤できる時間を十分に確保したりした。このことにより、子供たちは、主体性を発揮しながら遊び込むことができた。

【興味や関心のある遊びを通じて、つながりを深めてきた友だち関係】

船作りに興味のある子供が集まり、3から4人の小集団で遊びを進める中で、それぞれの思いや考えをしっかりと出しながら、遊びを進めることができた。

【人が乗れる船を作りたいという思いの強さ】

途中で船作りをやめたりせず遊びを継続できたのは、人が乗れる船を作りたいという強い思いをそれぞれが持っていたからである。船が動いた瞬間の子供たちの表情から、満足感や充実感が感じられた。この思いが次への意欲につながっていく。

先生方へ…



幼児期は想像力が豊かで、何かになりきって遊ぶ「ごっこ遊び」が大好きです。シンドバッドの世界に入り込み海賊ごっこ遊びを楽しむ中で、「乗れる船を作りたい」という強い願いを持ち、友だちと意見を出し合いながら、もっと丈夫な船になるよう、様々な素材の特性を生かし試行錯誤していきます。このように試行錯誤することにより、物事をいろいろな面から考えられるようになっていくのです。

遊んだ後の振り返りでは、楽しかったこと、困ったこと、工夫したことなどをみんなで話し合い、意見を出し合って価値や目標を共有することが大切です。振り返りの中で、子供たちは様々な考えがあることに気づき、それをまた遊びの中で生かすことで、さらに意欲が高まり遊びが継続していきます。

振り返りを重ね、自分たちで解決しながら遊びを進めていくことが、主体的・対話的で深い学びを可能にすると思われます。探求心を持って、考えたり試したりする経験から芽生えた思考力は、小学校生活で出会う新しい環境の中で、主体的に問題を解決する態度につながっていきます。

事例 42

5歳クラス
(5月)

やっとひけた！ドッジボールのコート

【活動の様子】

良く晴れた日、戸外に出ると、いつものように子供たちは、ドッジボールをしようと互いに誘い合い、8人ほどが集まった。

「線、引いてみる」とA児が大きなジョウロに水を入れ、ドッジボールのコートを描こうとする。重くて持てそうにないA児の様子を見たB児とC児が、ジョウロを持ったA児の所へやってくる。3人でジョウロを持ち上げようとするが、重くて持ち上がらない。

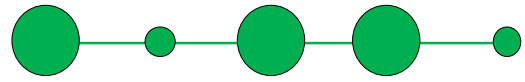
「これ水入れ過ぎじゃない？」、「(水)減らした方がいいんじゃない？」とB児が言うと、「そうじゃねえ」と、B児の意見に2人も賛成し、その場でジョウロから水を流してみる。そして、「軽いねー」、「いいねー」と言いながら、3人でコートに線を引き始める。

「ねえまだー？」と、遠くからドッジボールをしようと集まった数名が声をかける。「待ってー！」と言うA児の声を聞いて、他の子供は、周りでボールを投げたり遊んだりして待っている。

3人は、「また水、無くなったー」、「もう一回、水入れんといけんわー」と、何度も何度も繰り返して手洗い場と運動場を行き来している。途中で、B児はジョウロを持つのをやめる。A児とB児は真っ直ぐ線を引こうとするが、うまくいかず、「また斜めになっとるー」と、笑い合っている。

残りは、センターラインだけという時、そうっと引いていたが、真ん中の所でジョウロの水が無くなる。「あ——」と大きなため息が漏れる。「もう何回(水入れに)行ったらいいんよー」と、A児とC児は悔しそうな表情を浮かべていたが、また走って水を入れに行く。

そして、「いつもより大きくなり過ぎたけどね」、「できたよー」と、待っていた子供を呼び、やっとドッジボールが始まる。



感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかわる力

【遊びの中で育まれている力】

- 自分たちで線を引いてみたいと興味を持つ。
- 水の重さを感じる。【感じる・気付く力】
- 友だちがやっているのを見て興味がわく。
- 水の量が多くて運べないことが分かる。【考える力】

A児を中心に自分たちで線引きをしているので、3人の様子を見守ることにする。

- 量を減らすと運び易くなることが分かる。【考える力】



周りの子どものドッジボールがしたいという気持ちを汲み取り、一緒に見守ることにする。

- これくらいかな？と思って水を入れるが、量が足りないことが分かる。【考える力】
- A児とB児は次第に出来上がっていくコートに、見通しが持てたことで、目的に向かう気持ちが高まる。【やりぬく力】
- 2人で協力することや、周囲からの期待に責任を感じている。

- これくらいの量で引けるだろうと推測して、水を入れたが足りなかった。水の量と引ける線の長さの関係に気が始めている。【感じる・気付く力】
- 最後まで完成させたいという気持ちを持ち、諦めずに自分たちの力でやり遂げることで、満足感を味わう。【やりぬく力】

試行錯誤を繰り返し、やり遂げた姿をしっかりと認め、次への意欲や自信へとつなげていく。

この遊びの中での学びを支えたもの

【大好きなドッジボール】

普段から友だちを誘い合い、ドッジボールを楽しんでいた。純粋にドッジボールがしたいという気持ちから、「早く遊びたい」という気持ちが高まり、保育者を待つのではなく、自分たちでコートを描く気持ちになった。

【自分たちでコートを描きたいという気持ち】

チームに分かれてドッジボールを楽しむ中で、チームの人数やコートの広さを同じにする必要性に気付き、自分たちで人数を数え調整したり、陣地の広さを確認したりして遊んでいる。その中で、コートの形も自然に認識している。また、保育者がコートを描く手順を見て、「自分たちもできそう」と見通しを持てたことにより、友だちと一緒に最後まで諦めず線を引くことができた。

【ジョウロと水】

子供の手の届く位置にジョウロを置いておき、いつでも水が使えるように、水道を開放したり、コートが描ける広い場所を確保したりするなど、子供が自らコートを描けるような環境が整っていたことが、主体的な活動を促す要因になった。

先生方へ…



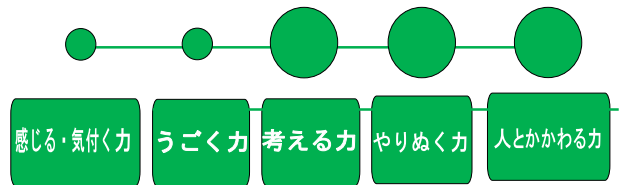
保育者がドッジボールのコートを描くのを日頃から見ていることで、子供たちはコートの描き方を覚え、自分たちで描いてみようという気持ちになったのでしょうか。そして、いつでも子供たちが自由に使えるジョウロを水道の場所に置いていたことも、コートを描く遊びのきっかけになったと考えます。

子供は友だちと一緒に水を運び、線を引く中で、ジョウロの水の量と重さの関係性に気付いていきます。また、ドッジボールのコートを描いたことで自信を持ち、今後、サッカー、野球、リレーのコートも自分たちで描き、主体的に遊びを進めるようになるのでしょうか。

このような経験から、子供たちはコートの形や大きさに関心が向き、次第に長さを図ることに意識が向くようになってきます。これは、ルール作りにもつながっていきます。

この活動の中で、コートの図形等に意識を向け実際に描いてみることで、形の感覚が芽生えています。このような経験は、小学校以降の学習に関心を持って取り組み、実感を伴った理解につながると共に、学んだことを日常生活の中で活用する態度につながっていきます。

どうやったらヤシャブシとれるかな



【活動の様子】

A児は、ケーキの飾り付けに使うため、何とかヤシャブシをとろうとしている。木に登ろうとし腕までは枝にかかるが、もうちょっとのところまでどうしても登れない。しばらくヤシャブシの実を下から見上げていたA児は、次に枝を投げることを始める。実に当てて落とそうとしたが、この作戦ではうまくいかない。

そこにB児が来たので、「ちょっと手伝って」とB児を抱っこして持ち上げて、何とかとれないかとやってみる。ダメだったので交代してB児がA児を持ち上げたのだが、これもうまくいかない。それでもA児は諦めることなく実を見上げる。そして、下に落ちていた枝に気が付き、引っかけて枝でたぐり寄せ始める。背伸びまでしながら、重たい枝を精一杯上に伸ばして、低い位置にあるヤシャブシの枝に引っかけると、枝が下がってきて、「とれた!」と叫び、一つのヤシャブシを手に入れる。先ほどの小枝でたぐり寄せることのできるころには、ヤシャブシの実は1個しかなかったため、別のところの枝をジャンプしながらたぐり寄せようとするが届かない。

そこで、A児は、そこに落ちていた5メートル以上あるツルを使ってたたき落とそうとした。しかし、1人では重すぎてツルを扱うことはできない。そこで、B児ら数人と一緒になり、「こっち上げるよ」、「それ!」などと声をかけ合いながら、ツルをムチのようにして使い、ヤシャブシの実を落とすことに成功した。

【遊びの中で育まれている力】

- ・ A児は何とかしてとりたいと考える。

A児であれば、自分なりに試行錯誤してとろうとするだろう。ここでは、助言はせずに見守ろう。

- ・ A児は一度の失敗にくじけず、別の方法を考える。【考える力】【やりぬく力】
- ・ A児は、自分の願いの実現のために、友だちに協力を頼む。【人とかかわる力】
- ・ A児は、身近な環境の中から適切な道具を探し、それを使いこなす。【考える力】
- ・ A児は、成功体験を味わう。
- ・ A児は、一度の成功で満足することなく、次の方法を考えやり遂げる。【やりぬく力】
- ・ A児は、長いものだととれるのではという予想をして、それを使う。【考える力】
- ・ A児は、一人ではできないことでも、友だちと協力することで実現できることを体験する。【人とかかわる力】

引き続き、保育者が口出しをして邪魔することなく、A児のすることを見守ろう。これまでの経験を生かしながら、自分たちで考え、工夫しながら何とか思いを実現できるだろう。



この遊びの中での学びを支えたもの

【試行錯誤することができる素材や材料がある環境】

この事例におけるA児の試行錯誤を支えたのは、枝やツルなどの様々な材料がそばにあったからであろう。それらのものが身近にあり、自由に使うことができることで、A児は様々なやり方を思い付くことができ、多くの試行錯誤をすることが可能となった。

【友だちの協力】

A児の試行錯誤のいくつかは、友だちの協力があって初めて実現できるものであった。今までに頼んだり頼まれたりすることができる友だち関係ができており、今回もその友だちが目的に向かって一緒に協力してくれたことが、今回の試行錯誤を支えている。

【諦めずに試してみようとする気持ちの育ち】

この事例では、保育者はA児の力を信じ、特に援助を行わずに見守っている。今回、A児が、粘り強く試したり考えたりすることができたのは、今までに自分の力で試すことで実現できた成功体験の積み重ねなどを通して、できるという自信や、諦めずにやりぬく態度などが育っている、という保育者のA児理解がベースとなっている。

先生方へ…



ケーキの飾りに使うため、子供たちは、園庭にあるヤシャブシの実を友だちと一緒にとろうとしています。子供たちは目的達成のために、様々な手法を駆使しながら、試す面白さを遊びの中で感じています。また、ヤシャブシの実をとるために、身近にある様々なものを投げたり枝を引っ張ったりして試す中で、投げるものの性質や枝のしなり方等にも気付いています。このような経験は、新たな目標や課題が生じたときに、友だちと一緒に今までの体

験で培った知識を総動員しながら取り組んでいく意欲につながっていきます。

ここで大切なのは、保育者と子供の距離感です。この事例では、「難しいけどどうしてもとりたい」という子供の思いに共感しつつも、あえて遊びには介入せず、子供たちの視界に入らず保育者を感じさせない距離から、遊びを温かく見守っています。そのことで、子供たちは自分たちの遊びの世界で、安心して遊び込んでいけたのではないのでしょうか。

自分たちの手が届かない場所にあるヤシャブシの実を、友だちと一緒に考えを出し合いながら試行錯誤してとることのできた成功体験は、小学校以降の自立心や苦手なことにもチャレンジする力へつながっていくと考えます。



事例 44

5歳クラス (6月)

やったー！フェンスが立った！

【活動の様子】

「昨日、カープ勝ったよね」毎朝、A児はカープの話題を熱く語る。そこに、「見た、見た。3-1で勝ったんよね」とB児が笑顔で話に入って来る。カープが大好きなA児とB児の間で、新聞ボールとラップの芯を使って野球ごっこが始まる。始めは2人での遊びだったが、周りにいた友だちが集まり、4、5人に増える。

A児が、「先生、俺、球場（マツダスタジアム）が作りたいんよ」と言うと、B児が「いいねー！」と言う。段ボールを使ってスタジアム作りが始まる。

段ボールカッターを使って切る時は自然と支える側、切る側に分かれて作業をしている。ガムテープでつなげて長いフェンスを立てようと作ったけど、どうしても倒れてしまう。A児とB児で相談して、球場のように弧を描くように置いてみるけど、すぐにゆがんで倒れる。2人は「あーあ」と困った顔になっている。しばらくして、「じゃあ、これで付けてみる？」と言い、A児がガムテープで床に直接貼り付けてみるが、すぐに倒れる。A児とB児は悩んでいる。何かないかと廃材置き場に行き、ラップの芯を見付け、添え木にして付けてみるが、うまく固定できず立たない。

保育者が「この箱で試してみる？」と空き箱を立てているのを見て、ハッとした表情で何かに気付き、廃材置き場から空き箱を集めてくる。フェンスのカーブに沿って空き箱の柱を貼っていくと、フェンスが立ち、A児もB児も、「やったー、立った」と、嬉しそうである。球場が出来上がってくると、いつのまにか友だちが集まって来て遊びが始まる。

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかわる力

【遊びの中で育まれている力】

- ・友だちと共通の話題で思いを伝え合う。【人とかわる力】
- ・身の周りのものを使って、イメージしながら模倣（野球）して遊ぶことを楽しむ。

- ・自分の思いを言葉で伝える。【人とかわる力】

球場作りへの意欲を大切にしたい。大小様々な段ボールを使って自由に作ってほしい。

- ・どんなものが作りたいかイメージを膨らませる。
- ・友だちと役割分担しながら、協力する。【人とかわる力】
- ・球場のフェンスを立てようと、試行錯誤を繰り返す。【考える力】

フェンスを立てるために、友だちと一緒に考えを出し合いながら、遊びを進めている。頑張っている姿を見守ろう。

- ・支えたり、直接テープで貼ったり、自分たちなりに考える。【考える力】



何度も失敗している姿から、フェンスを立てたいという気持ちを汲み取り、柱になる空き箱を示し、子供たちが立つことに気付くように促す。

- ・箱は立つことが分かり、フェンスを立てられる見通しが持てる。空き箱を付け足し、イメージしたものを作り上げる。【考える力】
- ・友だちと共通の目的に向かって作り上げ、楽しさや達成感を味わう。【やりぬく力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【主体的な遊びができる環境】

いつでも使いたい時に自由に材料や用具を使うことの出来るコーナーを設置し、整えておくことで、子供たちが自分で考えたり、工夫したりしながら主体的に遊ぶことができた。また、試したり、やり直したりを繰り返し行える環境があったことで、目的に向かって何度も何度も挑戦できた。

【子供の心を読み取り、共感する保育者の存在】

野球ごっこを楽しみ、球場を作りたいという強い願いが生まれ、友だちと一緒に球場を作っていく中、段ボールのフェンスを作り、弧を描いて立てたいという目的が生まれた。その目的に向かい、試行錯誤する子供の心に寄り添い保育者も一緒に考える中で、子供たちは、箱を使うとフェンスが立つことに気付き、成功したことがさらなる意欲につながった。

【同じ目的に向かって遊ぶ友だちの存在】

一人一人のアイデアや思いを出し合いながら、遊びの中で共通の目的が生まれ、遊びが広がっていった。遊びを通して楽しさや喜び、また難しさなどを共感してくれる友だちの存在があることで、相談しながら遊びを発展させたり、困ったときに意見を出し合い助け合ったりすることができた。

先生方へ…



子供たちは、球場のフェンスを段ボールやラップの芯を使って作っていますが、思うようには立ちません。挫折を繰り返す姿を見て、保育者は子供のイメージが実現できるよう、長四角の箱を用意し、フェンスが立つよう、さりげなく遊びを支えています。このように、保育者は子供の主体的な遊びに寄り添いながら、子供が試行錯誤する中で、それぞれの素材の適材適所の用途に、自ら気付くことを大切にしています。更に、球場作りができる広い空間や、たっぷりと遊ぶ時間、様々な素材を準備し、環境を整えながら遊びを支えています。子供たちは、身近な事象に積極的に関わる中で、ものの性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりするようになります。そして、そのことを生かして、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、身近な環境との多様な関わりを楽しむようになります。また、友だちの様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをより良いものにしようとする姿が見られるようになります。



ダンゴムシの赤ちゃんが生まれた！

【活動の様子】

子供たちは園庭でダンゴムシを見つけては飼育ケースに入れるため、ケースには何十匹というダンゴムシがいる。図鑑でダンゴムシがニンジンを食べることを知ると、家庭から持ってくるなど、クラスみんなで世話をしている。

「すごい食べとる！」、「うわ～、ニンジンの上にも下にもいっぱいダンゴムシがおるー！」、「これはメスじゃ。背中に黄色いのがあるけー」など、気付いたことや考えたことを伝え合いながらダンゴムシの様子をじっくりと見ていた。その時、「あ、これ卵がある！！」とお腹に白いものがあることに気付く。「どれ、見せて」、「ほんまじゃー！！」と、喜び合っている。

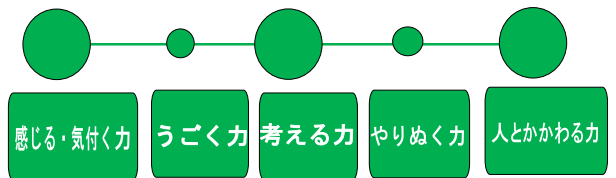


指でそっと掴み、お腹の様子を見ていたその時、小さな小さなダンゴムシの赤ちゃんがお腹から出て動き始める。子供たちは驚き、「わーっ！……赤ちゃんが出てきたー！！」と喜びの声をあげる。ダンゴムシを手に乗せている子供の周りに大勢の子供たちがかけ寄ってきて、「うわ～…ちっちゃー…」、「かわいいね～…」、「赤ちゃんの体、白い！！」などと、口々に気付きを伝え合っている。

友だちの会話を聞いて、A児が「黒い紙ちょうだい。赤ちゃんは体が白いから、黒の上に乗せたらよう見える」と言う。それを受け、B児が黒い折り紙を持ってくると、空き箱のフタに敷き、ダンゴムシを乗せる。そして、虫眼鏡を取り出してきて、「動きようね！」、「あ、触ったら丸くなった！」と、細かい動きや体の様子をじっくりと見ている。



赤ちゃんのダンゴムシも同じ動きをすることに気付き、「かわいいねー」と笑い合っている。この感動をすぐに他のクラスの友だちや保育者にも伝えに行き、みんなに見せている。



【遊びの中で育まれている力】

- ・ダンゴムシが好んで生活している場所をよく知っている。【感じる・気付く力】
- ・何を食べるのかを自分たちで調べる。【考える力】

餌を調べたり家庭から持って来たりと、ダンゴムシに愛着を持ち、ダンゴムシへの関心が高まってきている。

- ・背中の様子の違いに気付く。
- ・メスだから赤ちゃんがいるかも？と予測する。【考える力】
- ・本当に卵があったことへの驚きを、周りの友だちと共有する。【人とかかわる力】

図鑑から、様々な知識を持っているようだ。

- ・赤ちゃんが生まれた瞬間に出会えた感動を共有する。【人とかかわる力】

新しい命が生まれる瞬間に出会い、大きく心が揺り動かされている。心に残る貴重な直接体験ができた。

- ・命の尊さと神秘さを感じる。【感じる・気付く力】
- ・大人と赤ちゃんでは色も大きさも全く違うことを、実体験から学んでいる。【感じる・気付く力】

- ・白い赤ちゃんが見えやすいように、色を対比させる。【考える力】
- ・どのようにしたらもっとよく見えるかを考え、自分たちでよく見える状況を作り出す。【考える力】

- ・生まれたての小さなダンゴムシも、親と同じ形で同じような動きをすることから、ダンゴムシの生態に気付く。【感じる・気付く力】
- ・友だちと発見したことや感動したことを伝え合い喜ぶ。【人とかかわる力】

感動して心が動かされたからこそ、誰かに伝えたい気持ちが生まれている。子供同士学び合い、育ち合っている。

この遊びの中での学びを支えたもの

【ダンゴムシと触れ合える環境】

ダンゴムシがたくさんいる園庭で、実際に探す体験を行ったことから遊びが始まった。保育者が、子供たちのよく目に留まる場所に飼育ケースを置いたことで、子供たちが毎朝のぞいて様子を見たり世話をしたりし、ダンゴムシに自由に触れ合う状況が生まれた。その中で、継続した飼育と観察がはじまり、子供たちの学びを深いものにしていく。

【探究心を満たす環境】

不思議だなと思うことが調べられるよう図鑑を用意したり、必要な素材をいつでも使えるよう準備したりするなど、子供たちの探究心をかき立てる環境を整えたことが、虫眼鏡を出して調べたり、黒い紙の上に置くとよく見えることを見付けたりするなど、子供たちの主体的な学びを促した。

【子供の気づきを大切に、見守る保育者の存在】

体験を通して気付いたり自分なりに感じたりしたことを、周りにいる友だちや大人など誰かと共有していく場を大切にすることで、考える力や人とかかわる力が育まれていった。ダンゴムシの赤ちゃんとの関わりを通して、友だち関係も広がっている。

先生方へ…

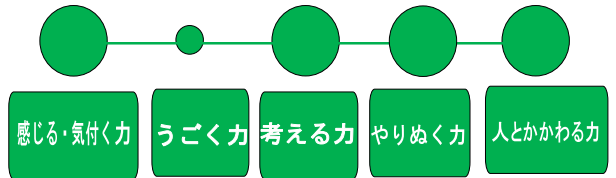


ダンゴムシとの関わりを通して、子供たちは生命の不思議さや命の営みに出会い、驚いたり、感動したりなど心の揺れ動く体験をしています。その中で、科学的な好奇心や探究心が育まれていきますが、それは、単に知的能力を伸ばすことにとどまらず、未知の世界と出会う喜びや、知る喜び、深く考える楽しさを体験することでもあり、このような体験が生涯に渡って学び続ける意欲や態度につながっていきます。

ここで何よりも重要な点は、保育者が、足下の小さなダンゴムシとの関わりを通して、子供たちが自然界の不思議さや奥深さと出会い、様々な気づきや学びをするであろうということを見通して、意図的に環境を構成している点です。見通しを持っておくことで、学びや気づきが次の一歩へと深まるような状況子供たちと共に作ることができ、主体的で深い学びが生まれているのです。

子供たちの好奇心や探究心を揺り動かす環境は身近にたくさん存在しています。それにもかかわらず、保育者がそれを見逃してしまえば、子供たちの好奇心や探究心の芽は十分に育ちません。保育者は、瑞々しい感性を持って周りを受け止め、子供がじっと見つめるまなざしに気持ちを重ね、発見や感動に共感しながら、たくさんの不思議と出会い、好奇心や探究心を深めていけるような状況を作っていく必要があります。

ピカピカのどろ団子



【活動の様子】

子供たちが、泥団子作りに興味を持っている。表面がデコボコしているもの、すぐに崩れてしまうものなど様々だが、自分なりの泥団子ができたことに満足している。そこで、保育者が、ピカピカの泥団子の写真や絵本の掲示を行ったり、作った泥団子を見せたりする。そのことで、「こんな泥団子が作りたい」という目標が生まれている。

この日も、3人が泥団子置き場に向かい、数日かけて作っている泥団子をビニール袋から取り出す。「触って。ここツルツルになっとるじゃろ」、「だいぶ固くなってきた！」と互いに見せ合い、固さや触り心地を比べたり感じたりしている。

A児は固くてツルツルの泥団子を作るため、さら粉をかけてはてのひらで磨く作業を何度も繰り返している。「ねえ！見てっ！ここ、黒く光ってきた気がする！」と発見を伝えると、「あっ、ほんただ！」、「Aくん、すごいね！見て、ぼくのも手でこすったら光ってきた！」と、B児も真剣な表情で磨き続ける。

A児は、「あのねー、茶色の土だったら磨いても光らんかったけど、最初に茶色い砂（真砂土）かけてねー、それから白い粉かけてねー、で、この黒い土（園庭の隅の土）かけてから磨いたから黒く光ったんよ」と、友だちや保育者に一生懸命説明し、いろいろな場所の土や砂をかけて試している。

その後、突然A児が「見て！太陽に当たったらピカピカ光ってきた！」と大声で呼ぶ。見ると、泥団子はさっきよりもずいぶん黒光りしている。「もしかして完成？」と保育者が尋ねると、「うん、まだ全部こすってないけー、後で続きするんよ！」、「(泥団子の写真を指差し)13番を作りたいんだけど、まだ11番くらいじゃけえ、給食の後でまた続きする」、「うん、おれも」そういうと、3人は泥団子を大事そうにビニール袋に片付ける。

【遊びの中で育まれている力】

- 泥団子作りに興味を持ち、自分なりの作り方で思い思いに楽しむ。

目標や見通しを持って泥団子作りに粘り強く取り組めるよう、泥団子が出来上がっていく過程や段階の分かる写真や絵本を用意してみよう。ピカピカの泥団子を置いておくと、より興味を持つかもしれない。

- 泥団子のツルツルした感触に気付く。

【感じる・気付く力】

- 泥団子の変化を感じる。

【感じる・気付く力】



- 目標ができたことで、さらに意欲的に泥団子を作り始める。【やりぬく力】

- それぞれの発見を伝え合ったり、認め合ったりする。【人とかかわる力】



- A児は、場所で砂や土の色が違うことに気付く。【感じる・気付く力】

- A児は、どうやったら光るか、光らせる方法を見付ける。【考える力】

- 友だちに自分の発見や気づきを分かりやすく伝える。【人とかかわる力】

- A児は、泥団子を太陽に当てたら黒く光ることを発見し、感動する。【感じる・気付く力】

- A児は、目標とする泥団子を目指し、粘り強く取り組もうとする。

- 泥団子に思い入れを持ち、続きができるように丁寧に片付ける。

A児はここまで集中して遊び込み、何度も試して、自分なりのピカピカの泥団子の作り方を見付けている。A児の良さが今後、クラスの中でも発揮されるようにしていこう。

この遊びの中での学びを支えたもの

【一つの遊びに没頭し、継続して遊び込める生活】

泥団子作りに連日取り組み、しっかりと遊び込んでいる。その背景に、この遊びの楽しさを十分に味わっていることが読み取れる。また、保育者が「より立派な泥団子が作りたい」という子供の強い思いを支え、援助したことも支えの一つになり、子供たちは継続して遊びを楽しみ、発見や学びが深まっていった。

【失敗体験を通しての気づき】

たくさんの失敗、そこでの気づき・試し・発見が、次の遊びに生かされ、成功体験につながっている。小さな達成感が積み重なることが、遊び込む力へとつながっている。

【見通し・目標が持てるような刺激】

自分なりに目標・目的を持って遊びに取り組むきっかけの一つとして、写真や絵本などを掲示したことで、見通しを持って取り組むことができた。

【一緒に目標に向かう友だちの存在】

同じ目標に向かって気持ちを交わしながら一緒に作り続ける楽しさや、発見や気づきを共有したり、出来栄えを比べて認め合ったり、刺激を受け合ったりする友だちがいる喜びが、粘り強く作り続ける意欲を高めた。

先生方へ…



泥団子作りに興味を持ち何度も試行錯誤する中で、子供たちは、同じ土であっても場所や湿り具合によって色や性質が異なることを体験的に理解し、芯にする土、芯の周囲を固める土、湿り気を取るための土などをうまく使い分けています。そして、泥団子を光らせるには、これらの土をどの順番でどう使ったらよいかについても確かめながら体験的に学び取り、遊びに生かしています。また、保育者がタイミングよくピカピカの泥団子の写真を示したことで、子供たちのイメージや目標が明確になり、見通しを持って、諦めずに粘り強く作り続けています。失敗を繰り返す、何日も何日も作り続け、ようやく納得する泥団子が作れるようになったのです。

さらに、同じ目当てに向かい、友だちと一緒にピカピカの泥団子を作る中で、互いの情報を交換しアイデアを出し合うことで遊びがもっと面白くなることを経験し、友だちのよさや大切さを味わっています。保育者は、他の考えに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しみを味わっていけるよう、援助することも大切です。



どうやったら 粘土のみかんの木は
立つのかなあ

【活動の様子】

子供たちが、絵本「エルマーのぼうけん」の地図を見ながら、粘土で「みかん島」を作っていると、「見て。ミカンの木がいっぱいあるよ」、「いっぱい作らんといけん」とミカンの木を作り始める。しかし、作った木を立ててみると、倒れたり曲がったりしている。

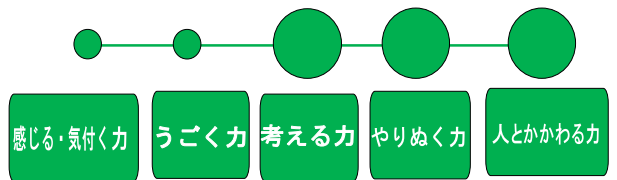
子供たちは、どうやったらミカンの木が立つか工夫し始め、A児は、「グニャッとなったらいけん。太くせんと」と気づき、B児は「見て！こうしたらいいかも」と根元を押さえて安定させようとする。それでも倒れる木があり、「何でかな…」と考えていたが、C児は「もうできんわ」と諦めかけそうになっている。

「太くしたのにどうして倒れたのかな？力を入れてもグニャッとならない方法はないかな？」と投げかけてみる。すると「本当の木は固いよ」、「固くしたらいいんじゃない」という意見が出たので、固くする方法をみんなで考え合う。「のりで固めたらいい」、「でもベタベタになるよ」、「凍らせたらいいい」、「溶けるんじゃない？」と粘土そのものを固くしようとする考えは出るが、芯になるものを使うなどの考えは出てこない。

そこで「何か固いものを使ったら、木みたいに立つかもしれないよ」と言葉をかけてみる。A児は「そうゆうことか」と製作コーナーから、短く切った割り箸やアイスのスプーンを持って来て、その周りに粘土を付け始める。

「Aくんがいいこと考えたよ」と知らせると「それいいね」と子供たちが集まり、諦めかけたC児も、「ほんとじゃ。やってみよう」とまねて作り始める。

A児が「芯になる割り箸全体に粘土を付けて立てると、できたけど木に見えん」と言うので、保育者は、「何で木に見えないのかな？」と尋ねる。すると、B児が、「木みたいになってないけえよ」と返してきたので、「どこが木みたいじゃないのかな？」ともう一度尋ねると、じっと見ていたが、今度は、「分かった！ここは木じゃけえ、粘土付んでいいんよ」と言って、木の幹になる部分の粘土を取っている。



【遊びの中で育まれている力】

- 面白かった絵本の話粘土で再現しようとする。【考える力】

「どうして？」と考える→「こうやったらいいかも」と試してみる…を繰り返し試行錯誤する姿があるので見守ってみよう。

- 自分たちの持っている力を出し合いながら、考えたり意見を出し合ったりする。【考える力】【人とかわる力】

保育者が答えを出すのではなく、子供自身がどうしたらいいか考えられるようにきっかけを作ってみよう。

- これまでの経験を総動員してアイデアを出し合う。【考える力】【人とかわる力】

保育者と子供の「固くする」というイメージが違った。子供の発想では、粘土そのものを固くするという発想になることが分かったので、保育者がヒントを出してみる。

- A児は、保育者のヒントからやり方が分かり、素材を選び試行錯誤する。【考える力】
- C児は、友だちの姿を見ることでイメージを持ち「できるかも」、「もう一回やってみよう」という気持ちになる。【やりぬく力】【人とかわる力】

一人の気づきをみんなに広げよう。

- 自分なりに完成をイメージして、様々な材料を選び、試行錯誤する。【やりぬく力】

「立つように作りたい」という思いが叶うと、次は「それらしく見えるように作りたい」と、願いが膨らんでいくのだと思った。子供の願いを明確化していく。

- B児は、考え直したりしながら、よりよいものになるよう工夫する。【考える力】

B児は、「いい考えじゃな。見て、ミカンの木は、上がとんがっとなるんじゃ」と言いながら、木の上部を細くし、形を整えている。

この様子を見て、諦めかけていたC児も、友だちをまねて作ると「葉っぱみたいにしよう」と表面を削っていく。「粘土を一杯付け過ぎたら重いけえ倒れるよね」などと、気付いたことを伝え合う姿も見られる。



・C児は、地図と同じように作りたいという目的に向かって、粘り強く取り組む。【やりぬく力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【イメージを具体化しやすく、いろいろな考えや工夫につながる環境】

「エルマーのぼうけん」をテーマにいろいろな遊びを継続したり、どうぶつ島とミカン島の絵を保育室に飾ったりするなど、保育者が意図を持って環境を構成することで、別々だったイメージが具体化してくる。

日頃から製作コーナーに、いろいろな素材が用意してあり、好きなものを作ることができる環境があるので、自分なりに考えて必要な素材を選ぶことができた。

【友だちと一緒にだから学びが深まる、遊びの中の楽しい学び】

自分なりに考えて試してもうまくいかないことがあるが、友だちと一緒にやると他の考えややり方があることに気付いたり励ましとなったりして、意欲につながる。

保育者が、子供の言動から遊びの中にある学びにつながる要素に気づき、投げかけることで、子供たちの思考が深まり、探究するようになっていった。

先生方へ…



絵本を読んだ後、子供たちの中にその面白さや感動が継続すると、そのイメージを思い浮かべながらいろいろな手段を使って想像の世界を再現しようと考えます。より本物らしく作りたいと思う5歳児では、絵本の世界を平面ではなく立体的に表現したいと思い、今までの知識を駆使して、友だちと一緒に試行錯誤を繰り返します。それでもうまくいかない時には、保育者がどこにつまずき、どうしようとしているのかを丁寧に見取り、知

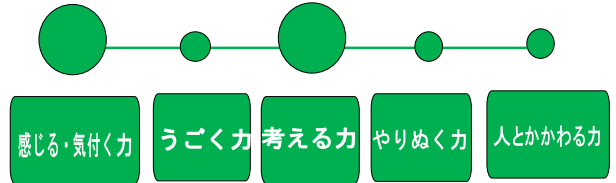
りたいことを的確にサポートすることが大切です。

また、製作活動においては、様々な道具や材料が身近にあり、子供たちが作りたいと思った時にすぐ作れる環境があることもポイントです。

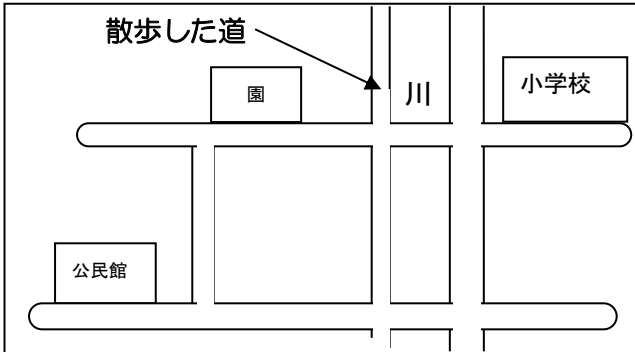
「立った木」、「本物らしい木」を作りたいという思いから、子供たちは友だちと考えを出し合い、目的を達成しようと試行錯誤を繰り返しています。この協同的学びの姿は、小学校で自分なりに考えた友だちと一緒に考えたり、物事を諦めずに取り組んだりする姿につながっていきます。



川がコーヒー牛乳みたい



【活動の様子】



雨上がりに散歩し、園の横の川沿いの道を通る。いつもは水が少なく、川底が見えるのどかな川で、飛んでいるチョウや鳥を数えながら歩いている。

しかし、今日はいつもより増水し、濁った水が勢いよく流れている。「うわ～。水が一杯になっとる」、「コーヒー牛乳みたいな色になっとる」、「昨日、雨がいっぱい降ったけえじゃ」と、子供たちは、いつもと違う様子に驚きながらも、面白がっている。

A児が「何で雨がいっぱい降ったら、コーヒー牛乳の色になるのかな？」と聞いてくる。

各地で起きている集中豪雨と、今、見ている光景が重なっていないのだと思い、「テレビで、雨がいっぱい降って、山の木が流れてきたり、川が壊れて水が家の中まで入ったりしてるの見たことない？」と尋ねてみる。

すると、すぐに「あるある。家が泥んこになっとった」、「道路が川みたいになっとった」と思い出して、言葉が返ってくる。

「この川も、もっと雨がいっぱい降ったら、溢れてしまって、園にも水が流れてくるかもしれないよ」と話すと「怖いなあ」、「危ないなあ」と言い合っている。

B児が「じゃけえ、洪水のときは小学校じゃない所へ逃げるんじゃな」と言う。

【遊びの中で育まれている力】

川の増水を見ることで、災害を身近に起こるかもしれないこととして捉えられたらと思い、川沿いのコースを散歩することにした。

- 川の変化に気づき、不思議に思い興味を持つ。
【感じる・気付く力】

- A児は、不思議に思ったことを言葉にする。

テレビで見たことを、現実のこととして感じていないようだ。子供たちに分かるように投げかけてみよう。

- 保育者の言葉をきっかけに、これまでの経験を思い起こし、イメージを重ねながら言葉にする。
【考える力】

いろいろな災害を想定して話し合うことで、子供たちに災害時の避難場所について意識付けていきたい。

- 川を見ながら、洪水について話し合ったことで、体験と知識が結び付き、いろいろな災害を想定した避難場所の違いが分かる。
【考える力】

火災や地震を想定した避難訓練では、この川を渡って小学校に避難することになっているが、洪水・土砂災害時には、川を渡らない場所に避難することになっていることに気が付いた。実際に自然体験をする中で、心が動かされ、真剣に考えることにつながった。

この遊びの中での学びを支えたもの

【体験することと、知識の結び付き】

いつもと違う増水した川の様子を見るという自然体験と、新聞やテレビなどの情報とをつなげていくきっかけ作りをすることで、災害時に自分たちがどうしたらよいのか気付くことができた。

先生方へ…



この事例では、雨上がりの散歩を通して、いつもはメダカやカエルのいる穏やかな川であっても、雨が降ると水の流れ方や色・量が変わり、いつもとは川の様子が違ってくことに子供たちが気付いていきます。保育者は、これをきっかけに、メディアなどでの話題や災害時の避難訓練などに関連させ、現実と結び付けることで、子供たちが身近なものとして捉え、どうしたらよいのかを真剣に考えることができるようにしています。

園・所等の周辺でも、いつ予想を超えた大地震や土砂災害に遭うか分からない時代になってきました。このような時代には、自分たちの生活につながるよう、子供と共に考えていけるようにすることが大切です。

今回の保育所保育指針には、「災害への備え」の項が新設されました。周辺で大きな災害が起きた場合を想定し、備えや安全対策を行うことを全ての保育所に課しています。避難訓練などは、ハザードマップなどについて情報収集をしたり、地域の施設を把握したり、地域とのつながりを作っておいたりするなど地域にあった訓練の在り方を考えていくことが重要です。



【活動の様子】

雨の日が続いた翌日、子供たちが互いに誘い合い、久しぶりにケイドロをしようと10人が集まっている。グーパージャンケンで、グーとパーに分かれて人数を数えることを何度か繰り返し、やがて「1・2・3・4・5…あ、5人ずつになった」と人数が平等になったことを確認すると、「じゃあこっちが最初に逃げる人(泥棒)になるよ。いい?」と、役を決めて遊び始める。

しばらくすると、A児が捕まり、「Bちゃん、助けてー!」と呼びかける。その声を聞いたB児がA児を助けようと駆け寄る。それに気付いた相手チームのC児は、わずかな隙を見てB児にタッチして捕まえる。

B児は、捕まってしまう、残念そうにしている。C児は、A児、B児が逃げないよう見張り始める。C児がわずかに後ろを向いていたその隙に、木の影から仲間がそっと近付き、A児とB児を助けることに成功する。C児は悔しそうな表情をしていたが、またすぐに友だちを追いかける。逃げる方も追いかける方も、「そっちに行った!」、「分かった!」など、仲間同士言葉をかけ合って遊んでいる。

「あっ、こっち来た来た!やばい!」一度は捕まったA児だが、今度はギリギリのところで相手をおかし、相手の動きをよく見ながら逆方向へ逃げ、身を守っている。C児は、A児の動きをよく見て、行くであろう方向へ走っていき、何とか捕まえようと必死になっている。

追いかける方も逃げる方も、周囲をよく見ながら、遊具の間をうまくくぐり抜けたり、水溜りを飛び越えたりしている。

思う存分遊ぶと、「あー、汗いっぱいいた!」、「ぼくも」、「Dちゃんって足速いけど、タッチできたんよ!」、「Eちゃんも足速くなったね」など会話をしながら、嬉しそうに保育室へ戻っていく。

【遊びの中で育まれている力】



- 友だちと誘い合って自分たちで遊び始める。【人とかわる力】
 - チームの人数が平等になるよう、人数を数え、合わせようとする。【考える力】
 - 友だちに助けを求めたり、ドキドキしながら勇気を出して助けに行くなど、応答し合うことを楽しむ。【人とかわる力】
 - 友だちの動きを見ながら機敏に動く。【うごく力】
 - 友だちを助けるために、鬼との距離感やタイミング、気付かれないように近づく方法を考える。【考える力】
 - 捕まえることができた嬉しさや、捕まった悔しさを味わう。
 - 捕まって悔しい気持ちを立て直し、遊びを続ける。
 - 友だちと作戦を立て、言葉をかけ合い、チームで力を合わせ協力して捕まえようとする。【人とかわる力】
 - A児は、一度捕まった経験を生かして相手をおかしたり逆方向に逃げたりする。【うごく力】
 - C児は、友だちの動きをよく見て動きを予測しながら動く。【考える力】
- 失敗経験を生かしたり、予測して動いたりなどして、よく考えて動いているので見守ることにした。
- 空間や周りの状況をよく見て、障害物を飛び越えたり、くぐり抜けたりする。【うごく力】
 - 思いっきり遊んだ後の汗をかき爽快感を味わう。
 - 楽しかったことを伝え合う楽しさを味わう。【人とかわる力】
 - 相手チームを捕まえるという目的に向かい、仲間と力を合わせて遊ぶ楽しさを存分に味わう。【人とかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【子供が夢中になり、自らが自発的に体を動かして遊ぶ楽しい活動】

子供たちは、逃げたり追いかけたりするドキドキ感・ワクワク感を味わいながら、夢中になって遊び、思い切り体を動かす楽しさや心地よさを味わっている。追いかけたり、逃げたりする中で、多様な体の動きが引き出され、多くの運動量も確保されている。

【友だちとの協力や連携が生まれるチーム対抗の鬼ごっこ】

チーム対抗戦であったため、自分たちでチーム分けの方法を考えたり、チームの人数が同じになっているかを数えて確認したりしている。また、相手に勝つ作戦を立てたり助け合ったりして協力する姿が見られ、友だちとの育ち合いや学び合いが生まれている。

【友だち同士の関係性や主体性の育ち】

友だちと誘い合って自分たちで遊び始める主体性が育っていたことや、考えを出し合いルールを共有し守りながら遊びを進める友だち関係がしっかり育っていたことが、この遊びの中での多様な学びを促した。

先生方へ…

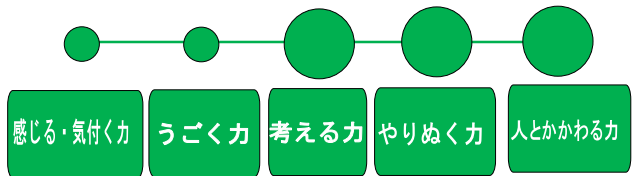


幼児期に、心と体を弾ませながら夢中になって遊び、体を動かす楽しさや心地よさを実感することを通して、自ら進んで体を動かそうとする意欲や態度を育むことが大切です。

この事例では、雨が上がるのを心待ちにし、友だちと誘い合って園庭に飛び出し、自ら体を動かして夢中で遊ぶ様子から、遊びが子供たちにとって魅力ある楽しい遊びであったことが分かります。それは、仲間と作戦を立てる、ドキドキしながら勇気を出して仲間を助けに行くなど、5歳児の興味・能力・チャレンジ精神を十分に満足させる、発達にふさわしい遊びであったからでしょう。

また、子供たちは、友だちの動きをよく見て、距離感やタイミングなど周りの状況を的確に判断し、予測にもとづいて、どう動くかを考えています。さらに、仲間とルールを共有するなど、コミュニケーションをとりながら遊びを進めており、瞬発力、柔軟性、敏捷性などの身体的な側面だけでなく、考える力や人とかかわる力など、様々な力が相互に関連しながら育まれていることが分かります。

このように、自ら進んで体を動かそうとする意欲や態度は、生涯にわたって心身ともに健康に生きるための基盤となるのです。



【活動の様子】

5歳クラスの子供たちは、グループの友だちとジャンケンで出すものを相談して決めて、グループ同士でジャンケンする「相談ジャンケン」が大好きである。普通のジャンケンの勝敗とともに、グループの友だちが1人でも間違えて出したチームは負けになるというルールがある。

2人対2人でのジャンケンでは、1つに決める時にもあまりもめず、間違えても「あ～ダメだったね」と言いながら、悔しそうであっても笑顔で遊んでいる。

少しずつ人数を増やしていくと、何を出すか、うまく決まらないことが増えてくる。「ゲーがいいんだってば」、「何でいっつも勝手に決めるんよ」、「ぼくはそれはいやだよ」と、なかなか決まらない。チームの中で1人だけ出す手を間違えてしまった時には、悔しさのあまり「もー！」と間違えた人に向かって、怒るような姿も見られる。「もーって言いたい気持ちも分かるけど、言われた人はどんな顔してる？」と話をすることもある。

ある日、時間がかかっても何を出すか決められないチームがあり、「決められなかった」ということで、負けになる。A児は、「もう！負けたじゃんか」と怒っている。「どうして決められなかったと思う？」と聞いてみると、「だって、嫌だ、嫌だって言って、全然みんなが決めてくれんのじゃもん！」と言い、同じチームの人たちの顔を見ない。「何で、みんな決めてくれなかったんだろう」と聞くと、同じチームのB児が、「だってAちゃんが全然話聞いてくれんのじゃもん」と言った。他の2人も頷く。A児は、はっとした表情になる。「そっか、Aちゃんも決めたいと思ってたけど、みんなも話を聞いてほしいと思っていたんだね」というと、A児は何も言わなかったが、じっと床を見て考えている。

参観日、お母さんチーム10人対その子供たち10人で、相談ジャンケンをすることになる子供たちは、嬉しそうにして、真剣に相談している。「ジャンケンポン！」お母さんはパー、子供はチョキ。その時、A児だけが間違えて出す。周りで応援していた子供も「あー」と残念そうである。A児は、思わずお母さんのところに駆け寄り、ポロっと涙をこぼす。すると、同じチームの子供たちがすぐに駆け寄ってきて、「そういうこともあるある！」、「次頑張ろうや！」と声をかける。A児は悔しそうにしてはいたが、「うん」と言って、仲間と一緒に椅子に戻る。そして、次のジャンケンで「がんばれー」と応援し、自分の番を楽しそうに待っている。

【遊びの中で育まれている力】

- ・チームの人と相談する。【人とかわる力】
- ・相手チームに勝つという共通の目当てに向かって心を一つにする。【人とかわる力】
- ・人数が多くなると、思い通りにいかないことに会う。
- ・ジャンケンの出し方を間違えた友だちに、怒りをぶつける。

自分が悔しいという気持ちで一杯になっている。間違えてしまった人の気持ちにも気付いてほしい。



- ・A児は、負けたことに怒っている。
- ・みんなは、全然話を聞いてくれないA児を怒っている。

自分の気持ちを伝えたいというA児と話を聞いてもらえないという他の仲間との気持ちを代弁することで、どうしたらよかったか気付いてほしい。

- ・A児は、自分の気持ちを押し付けるだけではうまくいかないことを意識しながら、友だちと関わる。【人とかわる力】
- ・どうしたら勝てるか考えを出し合って作戦を練る。【考える力】

メンバーの一員としての取り組み方に気付いてほしい。

- ・A児は、意見の食い違いを受け止め、折り合いを付ける。【人とかわる力】
- ・A児は、失敗をした自分と向き合う。【人とかわる力】
- ・みんなは仲間を許し、励ます。【人とかわる力】
- ・A児は、くじけそうになった気持ちを立て直し乗り越える。【やりぬく力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【自分たちで考える時間の確保】

意見を伝え合い、意見の食い違いがある中で、子供たち同士で考える経験ができるよう時間を確保した。できるだけ、どうしたらいいかを自分たちで考えることができるようにした。そのことで、自分の意見を押し付けるだけではうまくいかないということや、「嫌だ」と伝えるだけでは決まらないということなど、自分の思いに折り合いを付けるということに、それぞれが気付くことができた。

【遊びを繰り返す中での考える機会】

子供たちの思いがなかなか一致しない中で、遊びの機会を奪うのではなく、何度も繰り返して遊ぶことができるようにした。遊ぶ回数が重なることに、考えざるを得ないことが出てきたことで、遊びの内容が充実していった。困難を解決する力が、個の力としても集団の力としても付いたと思われる。集団で遊ぶ中でうまくいかない状況が起こった際に、遊ぶ機会を奪わないで遊びが継続するように、保育者が根気強く関わることが大切である。

【周りにいる友だちの存在】

「嫌だったよ」とはっきりと言うことや、ストレートに気持ちを伝えることで、相手を傷つけてしまうこともあるが、何でも思いを言い合える安心できる仲間の存在を大切にしたい。どんな自分も受け入れてくれる仲間の中で、失敗体験をし、弱い自分も安心して出すことができたことから、うまくいかなかったことを何とか乗り越える経験ができた。

【自己肯定感を育むことができるよう支えた保育者の存在】

失敗することはダメなことではなく、どんな自分も素敵だと思えるよう、保育者が関わった。日々の保育の中で「うまくいかない自分」や「よくなかったことに気が付いている自分」に向き合えるよう、立ち止まり、気持ちの代弁をしたり見守ったりしながら一緒に考える時間を大切に、自己肯定感を育むことができるよう支えることが大切である。

先生方へ…



ジャンケンを楽しむことができる子供たちは、ルールに沿いながらジャンケンゲームをしようとするのですが、同じグループの中で子供同士の関わりがうまくいきません。勝負にも負けてしまうのです。「もう！負けたじゃんか」と自己主張するA児は、友だちとの関係から人との関係の在り方を学んでいきます。

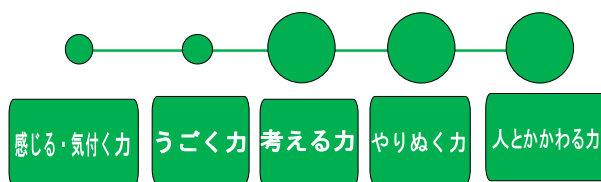
幼児には自己主張などをする自我と社会的知性を育む第二の自我があり、矛盾や葛藤などを乗り越えながら自己決定するようになります。4歳半を過ぎるころから、子供はこの二つの自我を統一しながら自己決定する力（自己内対話能力）を獲得するようになるといわれています。A児はまさしく、保育者の関わりによって葛藤を乗り越えていったのです。また周りの子供たちも、間違ってしまったA児に対して、要求ではなく許容する知性等を身に付けていきます。いろいろなやりとりをしながら、やがて関わりがスムーズになっていきます。

このように友だちと一緒に遊ぶ中で、自己との対話を通しながら、人間関係の力を付けているのです。子供たちが、今、身に付けようとする力を見極めながら、関わることの大切さを感じます。

事例 51

5歳クラス (12月)

お楽しみ会ごっこ それ、いいね



【活動の様子】

隣のクラスがクリスマス会ごっこをして盛り上がっている姿を見て、A児たちが「自分たちもしたい」と保育者に伝えてきた。そこで、クラスのみんなに自分たちの思いを話した。すると、クラスのみんなども「それ、いいね」とお楽しみ会ごっこをすることになった。そこで、チームごとに出しものを話し合う場を持った。

A児は集団や人前では自分を素直に表現することがあまり得意ではないが、積極的にチーム（5人組）の中で「どんなことする？」と友だちに聞いている。B児の「紙芝居とかは？」との意見に「それ、いいね」と、とても乗り気である。話合いの結果、A児のチームはB児が考えた紙芝居「ももんがのおひっこし」に決定する。

紙芝居チームは、次の日から意欲的に紙芝居作りを始める。文字が書けるA児とB児は、友だちから「文字を書いて」と頼まれ、2人で相談しながら嬉しそうにストーリーを考え、紙芝居を完成させていく。

踊り、歌、合奏、鉄棒の披露、保育室の飾り付け等、各チームがそれぞれにお楽しみ会に向けて練習や準備をし始める。

練習や準備をする中で他のチームの仕上がり具合が刺激となり、それぞれのチームが工夫しながら、より楽しいものになっていく。

お楽しみ会当日のA児は、自作のマイクを友だちに向けたり、紙芝居がみんなに見えるように手を添えたりするなど、友だちと一緒にお楽しみ会を楽しんでいた。

【遊びの中で育まれている力】

- A児たちは、自分のやりたい気持ちを相手に伝える。【人とかかわる力】

子供たちのやりたいという気持ちを叶えるため、クラスのみんなどに相談する場を設けた。思いを伝え、みんなで話し合う中で、共通の目的を見出してほしい。

- 自分の意見を言ったり、相手の意見を聞いたりする。【人とかかわる力】
- A児は、少人数ということもあり、緊張感なく発言する。

自分の意見を素直に伝えることができている。相手の意見にも耳を傾けてほしい。

- A児は、友だちの意見に共感し、同じ目的の実現に向け力を合わせてやり遂げる。【やりぬく力】
- 友だちと話合いをしながら、役割分担をする。【人とかかわる力】

練習をしたり、他のチームを見たりすることで、自分のチームを見直し、さらによくするためのきっかけとにしてほしい。

子供たちの思いが実現できるように、その都度、素材や用具の準備をする。

- 自分たちが楽しむだけでなく、お客さんを楽しませるためにどうしたらいいか話し合う。【考える力】
- 友だちと声をかけ合い、見通しを持つ。
- A児は、友だちと協力し、やり遂げたことで達成感を感じる。【やりぬく力】



この遊びの中での学びを支えたもの

【任されたことで芽生えた自己肯定感】

それぞれの意見を出し合い、役割分担しながら、自分たちで考えた遊びが実現に向かって進む中で、子供たちは友だちのよさに気付くとともに、自分も友だちに認められていることに喜びを感じている。このことが、子供たちの自己肯定感につながった。

【自由に使える製作コーナー】

子供たちの手の届く位置に紙芝居を作るのに必要な材料を置いて、いつでも使いたいものを自由に扱えるようにしたことで、子供たちが話し合いながら、主体的に遊ぶことができた。

【「お楽しみ会」を楽しみたいという気持ち】

子供の遊びはワクワク感やドキドキ感がベースとなる。5歳児のこの時期はクラスで一つの目的に向かって、それぞれが思いを出し合いながら、協力して遊ぶことが大切である。

「自分たちもしたい」と言って始まったお楽しみ会ごっこであるが、クラスのみんなで楽しさを共有したい気持ちが、目的達成への意欲を支えていった。

先生方へ…



隣のクラスのクリスマス会ごっこが刺激となり、クラス全体で「お楽しみ会ごっこ」をすることになりました。保育者は、各グループに分かれてそれぞれが役割を分担しながら「お楽しみ会ごっこ」ができるように、子供たちの意見を尊重しながら、クラス全体で目的意識を持たせるようにしています。

遊びを進めるに当たって、保育者は、一人一人の子供の特性を考慮しながら、遊びの中で生かされるよう配慮をしています。紙芝居のグループでは、今まで自信のなかった子供が、字を書いたりストーリーを考えたりと自分の得意な力を発揮し、それを友達に認められる中で、責任を持って役割を果たす喜びを感じ、友だちと一緒に生き生きと遊ぶようになっていきます。

この協同的な学びの中で、子供たちは、自分の思いや考えを友だちに伝えること、友だちの思いや考えを受け止めること、目標を持って取り組むこと、互いのよさを生かし認め合いやり遂げる中で自信を持つことなどを経験しています。

このように、遊びの中で培われた自立心は、小学校生活において、自分でできることは自分でしようと積極的に取り組む姿や、生活や学習での課題を自分のこととして受け止め意欲的に取り組む姿、自分なりに考えて意見を言う姿、分からないことや難しいことは先生や友だちに聞きながら粘り強く取り組む姿などとして現れ、子供たちが日々の生活を楽しくすることにつながっていきます。



◆事例集の作成に御協力いただいた先生方

この事例集作成に当たり、御指導いただきました有識者の先生方を始め、多くの実践を積み重ねられ、事例の収集や検討に御尽力いただきました幼稚園、保育所、認定こども園の先生方、そして、御支援くださいました関係者の皆様に、心より感謝いたします。

事例検討作業委員の先生方



尾道市立向島認定こども園		鑑廣 徹 先生
社会福祉法人賀茂川福祉会		
幼保連携型認定賀茂川こども園 園長		柄崎 佳之 先生
幼保連携型認定賀茂川こども園		樋口 雅子 先生
福山市立津之郷保育所 所長		小森 律子 先生
社会福祉法人若竹福祉会横浜若竹保育園 園長	園長	重森 弥生 先生
学校法人広島南部教会学園フレーザー幼稚園 園長	園長	手塚由美子 先生
学校法人広島南部教会学園フレーザー幼稚園		平岡麻衣子 先生
広島大学附属幼稚園		松本 信吾 先生
尾道市立百島幼稚園		三浦 恵子 先生
学校法人有朋学園かえで幼稚園		見山 惟章 先生

御指導いただいた先生方

福山市立大学 教育学部	准教授	倉盛美穂子 先生
新見公立短期大学	特任教授	
福山市立大学	名誉教授	高月 教恵 先生
広島大学大学院教育学研究科	准教授	中坪 史典 先生
広島大学大学院教育学研究科	教授	七木田 敦 先生
安田女子大学・安田女子短期大学保育科	教授	橋本 信子 先生

この事例集の活用について、園・所内での研修をお考えの際は、



「幼児教育アドバイザー訪問事業」を御活用下さい。

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/youji-index.html>

